

6月刊

リスク学事典

日本リスク研究学会 編 A5判・834頁 定価（本体22,000円+税） ISBN978-4-621-30381-8

様々なリスクに対処するための学問の集合体

- 人文科学、自然科学、社会科学など多様な分野のリスクを横断的に俯瞰。
- 中項目事典の体裁をとることで、リスク学を構成する各分野の相互関係性をわかりやすく把握。
- 東日本大震災、リーマンショック、女性や性的マイノリティの社会的排除など、現代的な問題に起因するリスクも大々的に取り上げる。
- 市民が様々なリスクに直面する現代にあって、それを把握して共生していくための必読書。

刊行にあたり

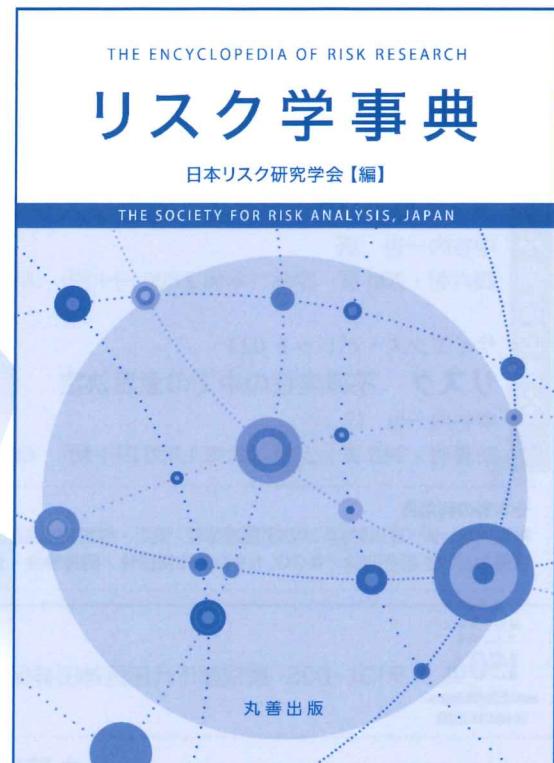
本事典は、多様な対象と学問を可能な限り横断的に俯瞰して、リスク学の本質と輪郭を浮かび上がらせることを試みました。もちろん、すべての分野に共通する定義や手法を抽出することは困難ですが、最大公約数的な共通見を見出すことは可能です。本事典では、リスク学をリスクの取扱いを巡る、個人的および社会的な意思決定に関わる多様な学問の集合体と捉えています。とりわけ基礎的科研究と現実社会の問題解決とをつなぐ部分を可視化することにこそリスク学の最大の存在意義があり、その意味では多くの部分がレギュラトリーサイエンスと呼ばれる分野に属しています。

また、リスク学はまだ現実になっていない事象、また現実になるかどうかわからない事象を取扱う、将来を予想する学問という側面を持っています。人間は1秒先の未来も知ることができないので、大げさに言えば神の領域に近づく蓋然性を少しでも高めようとする人間臭い学問と言えるかもしれません。そのためリスク学は不確実な状況下においても少しでも合理的な意思決定をしたいという人間社会の飽くなき欲求に従いながら発展してきました。この合理的な意思決定には、科学的合理性だけでなく社会的合理性も含まれます。科学的合理性から1つの解が出てくることはむしろ珍しく、多様な価値観や立場の人々がどのようにそれを受け止めているかを常に考慮しなければなりません。すなわち①分野ごとの固有の課題や考え方を尊重しつつ②分野横断的に適用可能な考え方や方法論を丁寧に抽出し、かつ③解釈の多様性を認めつつ、④複数の科学的決定方法を提案することが求められます。（中略）

そこで、日本リスク学会創設30周年の節目に一度立ち止まり、リスク学の学問体系を再点検、再確認し、次の時代に備えることが重要と考え、学問体系を整理した『リスク学事典』を発刊することといたしました。

本事典は4部構成とし、第一部が「リスク学の射程」、第二部が「リスク学の基本」、第三部が「リスク学を構成する専門分野」、そして、第四部が「リスク学の今後」としました。（中略）この事典が、新しいリスクの時代に、直面するリスクに真摯に向き合う一人ひとりにとって重要な一步を踏み出す契機となり、同時にリスクに立ち向かう勇気を与えることができれば幸いです。

編集委員長 久保英也



最新情報・詳細はこちらから→
丸善出版ホームページへ



丸善出版

